

スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)は 農作物や生態系に被害を 与えるおそれのある外来種です

スクミリンゴガイは、1981年に食用目的で初めて日本へ導入されました。当時は、全国に500箇所もの養殖場ができましたが、野生化したスクミリンゴガイが稲を加害し始めたことから、1984年に植物防疫法に基づき有害動物に指定され、輸入が禁止されました。

その後、養殖業の廃業が相次ぎ、大量のスクミリンゴガイが捨てられたり、逃げ出したりしました。野生化したスクミリンゴガイはどんどん増えて拡がり、水稲などの農作物を食害し、問題となっています。



スクミリンゴガイ

- ◆ 南アメリカ原産
- ◆ 成貝の大きさは5～8cm程度
- ◆ 長い触角がある
- ◆ 野外での寿命は3年程度
- ◆ 雑食性（主に植物食）

- ◆ ピンク色の卵塊を植物や水路の壁面などに産み付けます。
- ◆ 一つの卵塊に200～300の卵が入っています。
- ◆ 産卵から10日程度で孵化します。
- ◆ 卵には毒があるため、天敵に捕食されにくいといわれています。



スクミリンゴガイの卵

**スクミリンゴガイが生息していない水田で、除草を目的として、
本種を新たに導入することはおやめください。**

安易な導入は、地域の水稲被害を助長し、生態系を乱すことにもつながります。

生きた個体の野外への放逐を罰則付きの条例で禁止している自治体もあります。

農作物への被害

- イネ（水稻）、レンコン、イグサ、ミズイモなどの水田作物を食害します。
- 水稻の場合、田植え後2～3週間の若くて軟らかい苗が被害にあいやすく、苗がほとんどなくなってしまうこともあります。
- スクミリンゴガイは九州、四国、本州の太平洋側など、温暖な地域で多く発生しており、現在も分布の拡大が続いています。

生態系への影響

- 絶滅が危惧される希少な植物を食害するなど、生物多様性を低下させるおそれがあります。
- 環境省と農林水産省が作成する「生態系被害防止外来種リスト」において、対策の必要性が高い「重点対策外来種」に選定されています。
- IUCN（国際自然保護連合）が作成している世界の侵略的外来種ワースト100にリストアップされています。

被害の拡大を防ぐために

- 各地で防除（駆除）の取り組みが行われていますが、いったん増えてしまうと根絶させることは困難です。新たな導入や放流はやめましょう。

※ 農林水産省や各自治体のホームページ等で、様々な防除の方法が紹介されています。

※ スクミリンゴガイには広東住血吸虫が寄生していることがあります。人にも感染する可能性がありますので、素手で触らないようにし、触った後はよく手を洗ってください。

※ 食用とする場合は、寄生虫に感染するおそれがあるため絶対に生食はせず、十分に加熱調理してください。

ゴールデンアップルスネール・アップルスネールもスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の仲間です

観賞用のゴールデンアップルスネールやアップルスネールと呼ばれる巻貝は、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）またはその近縁種の黄化個体です。

- 野外に放さないでください。
- 屋外で飼育容器の水換えをする際には、水路や排水溝に稚貝が流れ出さないよう水切りネットなどを使用してください。



ゴールデンアップルスネール

条例によりスクミリンゴガイの飼育には届け出が必要な自治体もあります。